

## 記憶の稜線を歩く

柳原義達の作品を初めて見た時の経験は不思議なものだった。鴉や裸婦のブロンズ像を見る角度を変えながら鑑賞していると、ある瞬間、連続する形の変化がゴツゴツとした岩肌や山塊のような荒々しい風景に変わり眼前に広がったのである。それは、まるで小さな生き物の視点になって彫刻の起伏を味わうスケール感が逆転したような感覚を覚える体験で、眼に見えていることが全てではない眼に見えない何かを経験した瞬間だったと思う。

この度の個展は柳原義達の作品とのコラボレーションである。そこで、彫刻家である柳原の作品と、絵画を中心とした私の作品の架け橋として「稜線」をキーワードに選んだ。

稜線とは、峰から峰へと続く山の背を表す山岳用語である。この稜線は一見すると線状の起伏のつながりだが、実のところ奥行きを伴った起伏を持つ複雑な地形の連続でできている。この言葉は美術の世界でも使われることがある。デッサンや塑造をするとき対象物の連続する形の変化を捉える際に、便宜的に形の変わり目を表す用語として用いられる。芸大美大受験の予備校で、描く対象の形の変化を蟻の視点になって把握するといった趣旨のことを言われたことを思い出す。この時の講師の発言は、普段の視点で描く対象物に近づきすぎると、その対象が持つ大切な何かを見落としてしまうことに気付かせる教えだったのだと思う。

普段、私は「記憶」をテーマに、山や森などの具象物を描きながら作品の中に見えない何かを宿すことを試みている。しかし、その制作過程は、本質を捉えようとすると逃げていく、視覚で近づきすぎると見失ってしまうことの繰り返しである。そしてこの洗礼のような過程を経験する中で、あるとき何かが宿ったような瞬間が訪れるのである。彫刻家である柳原もまた、ジャンルは違えど似たようなジレンマを感じていたのではないかと想像する。

今回会場には布で覆った柳原の彫刻作品とそれを基に描いた絵画作品がある。改めて柳原の作品に対峙するとそのアウラは強烈で、絵画とは違う圧倒的に在るということの凄味を感じた。そこで、柳原の作品との繋がりを見つけるために布で覆うことを思いついたのである。これには、彫刻家でない私にとって柳原の作品が持つ見えない何かに触れることができるのではないかという思いが発端にある。そしてこの布で覆われた彫刻は、私に、蟻の視点になった感覚でその稜線を歩く機会を与えてくれた。

そして、この布で覆われた彫刻作品を描くことにより、柳原の彫刻作品を歩く旅は結実するのである。

今回の展示会場が、彫刻作品の「在る」というリアリティが生み出す見る角度によって刻々と移り変わる稜線と、絵画作品の描かれることによって内包する稜線、そして、鑑賞者が両作品に対峙したときに自身の記憶と行き来しながら生み出す稜線、これら全ての稜線が交差し新たな風景が立ち現れるような空間になればと思っている。

最後に、今回柳原の彫刻作品を布で覆うという実験的な提案に対して、ご快諾いただいたご遺族に心より感謝を申し上げます。

2023 年 11 月

藤原康博